

3. 京田辺市郷土塚 4 号墳出土遺物の再検討

諫早直人・池田野々花・守田 悠

1. はじめに

郷土塚古墳群は、京田辺市薪島から大住平谷にかけて存在した古墳時代中・後期の古墳群である(図1)(京都府教育委員会 2003)。6基の古墳の存在が知られており、鉄矛、鉄鏃、鉄斧、鉄鉋や家形埴輪、鳥形埴輪が出土し、古墳時代中期に築造されたとみられる2号墳(田辺郷土史会 1959) 以外は古墳時代後期の横穴式石室墳とみられる。本書Ⅲ-4で報告した畑山古墳群のすぐ北に位置し、甘南備山(標高221m)から北東方向にのびる同一丘陵上に築かれている。以下に紹介する郷土塚4号墳出土遺物は京都府埋蔵文化財調査研究センターによって1985年度に実施された京奈和自動車道の建設に伴う発掘調査の際に出土したもので、郷土塚4号墳出土鍛冶具は2018年に京都府指定文化財に暫定登録されている。この度、京田辺市史編さん事業の一環で、出土遺物の再検討を実施したのでここに報告する。

2. 郷土塚4号墳出土遺物

(1) 古墳の概要

発掘調査の結果、周溝をもつ直径約16mの円墳であることが明らかとなっている(図2-1)(石井ほか1986)。南西方向に開口する横穴式石室は、玄室長約3.7m、玄室幅約1.7m、羨道長約2.3m(推定)の無袖式で、玄室床面には拳大の河原石を全面に敷き詰めて礫床としている(図2-2)。玄室奥壁付近を中心に礫床およびその直上から須恵器、土師器や、以下に紹介する金属製品が出土している(図2-3)。須恵器から古墳の築造はTK43型式期、6世紀後半とみられている(小池1988)。(諫早直人)

(2) 鉄製鍛冶具(図3-1・2)

鉄鉋と鉄鉋が1点ずつ出土している。出土直後に保存処理されたものの状態がよくなかったため、再実測はせず観察所見をふまえて既存の図面(小池1988)を再トレ



図1 郷土塚・畑山古墳群とその周辺の古墳・遺跡分布図(S=1/15000)(岡田大雄作成)

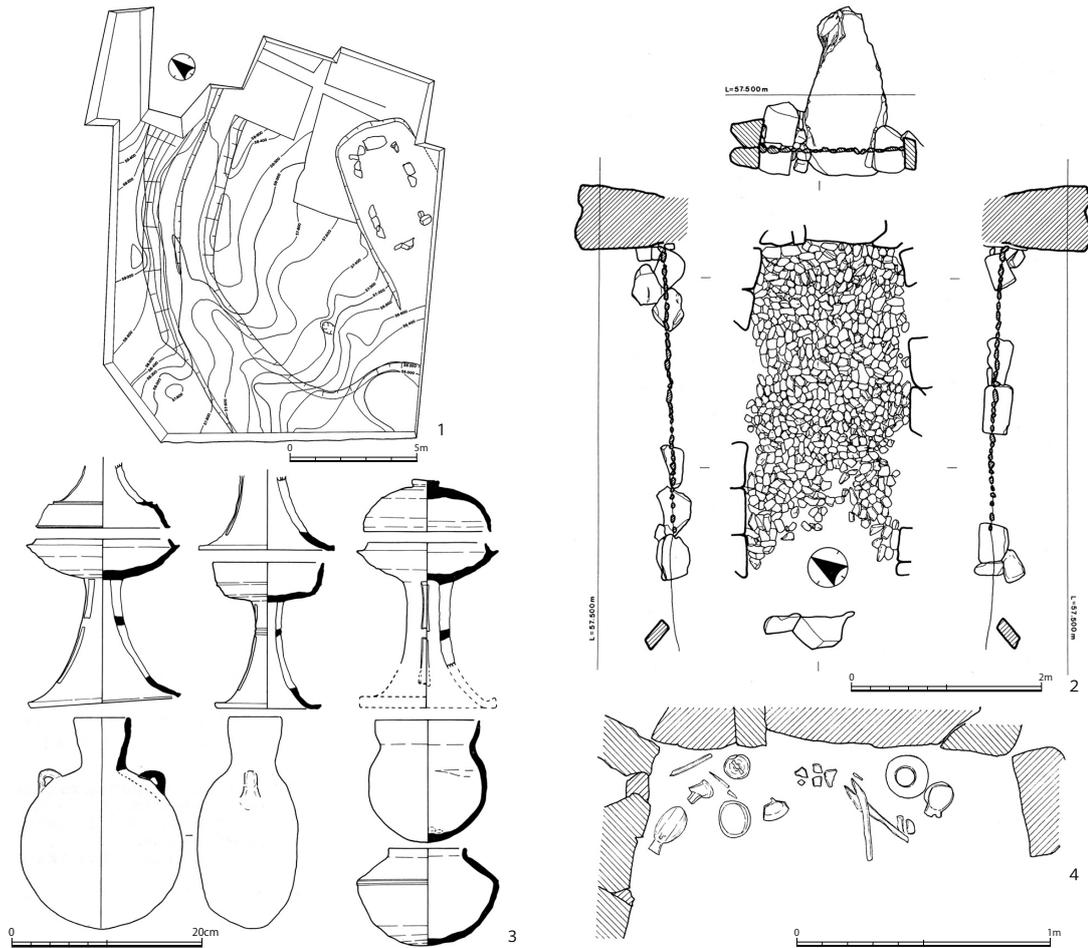


図2 郷土塚4号墳と出土遺物（石井 1985、石井ほか 1986 を一部改変）
 （墳丘実測図 S=1/300、石室実測図 S=1/80、出土状況図 S=1/30、遺物 S=1/8）

ースした。

1は鉄鉗で全長 28.4cm、重さ 293.0g をはかる。上下の鉄棒は形状が若干異なる。図上で上位の個体は全長 29.6cm、はさみ部は長さ 8.9cm、幅 1.4cm、厚さ 0.6cm、握り部は長さ 20.7cm、幅 1.0cm、厚さ 1.0cm をはかる。断面ははさみ部が長方形であるのに対し、握り部は方形である。図上で下位の個体は全長 28.8cm、はさみ部は長さ 8.6cm、幅 1.5cm、厚さ 0.8cm、握り部は長さ 20.2cm、幅 1.2cm、厚さ 1.0cm をはかる。断面ははさみ部が台形であるのに対し、握り部は隅丸方形である。両者は結合部中央に挿入された長さ 1.6cm、径 0.7cm の鉄製鉸によって連結されている。はさみ部は顎の屈曲が弱く直線的な形状で、握り部は肩が緩やかに屈曲する。なお、出土時からはさみ部が開いた状態で錆着しているが、図上で閉じあわせても先端がうまく接触しない（図3-3）。

2は薄手の鉄鎚で全長 14.4cm、最大幅 3.4cm、最大厚 1.4cm、重さ 226.4g をはかる。図上の下端面は幅は 2.8cm、厚さ 1.4cm であるのに対し、上端面は幅 2.1cm、厚さ 0.9cm と、下端面をやや大きくつくる。両端ともめくれなど顕著な使用痕は認められない。正面ほぼ中央に長さ 2.5cm、幅 0.7cm の孔がある。孔の周囲は表面側がほぼ平らであるのに対し、裏面側は孔に向かってへこんでおり、裏面側から穿孔した可能性が高い。

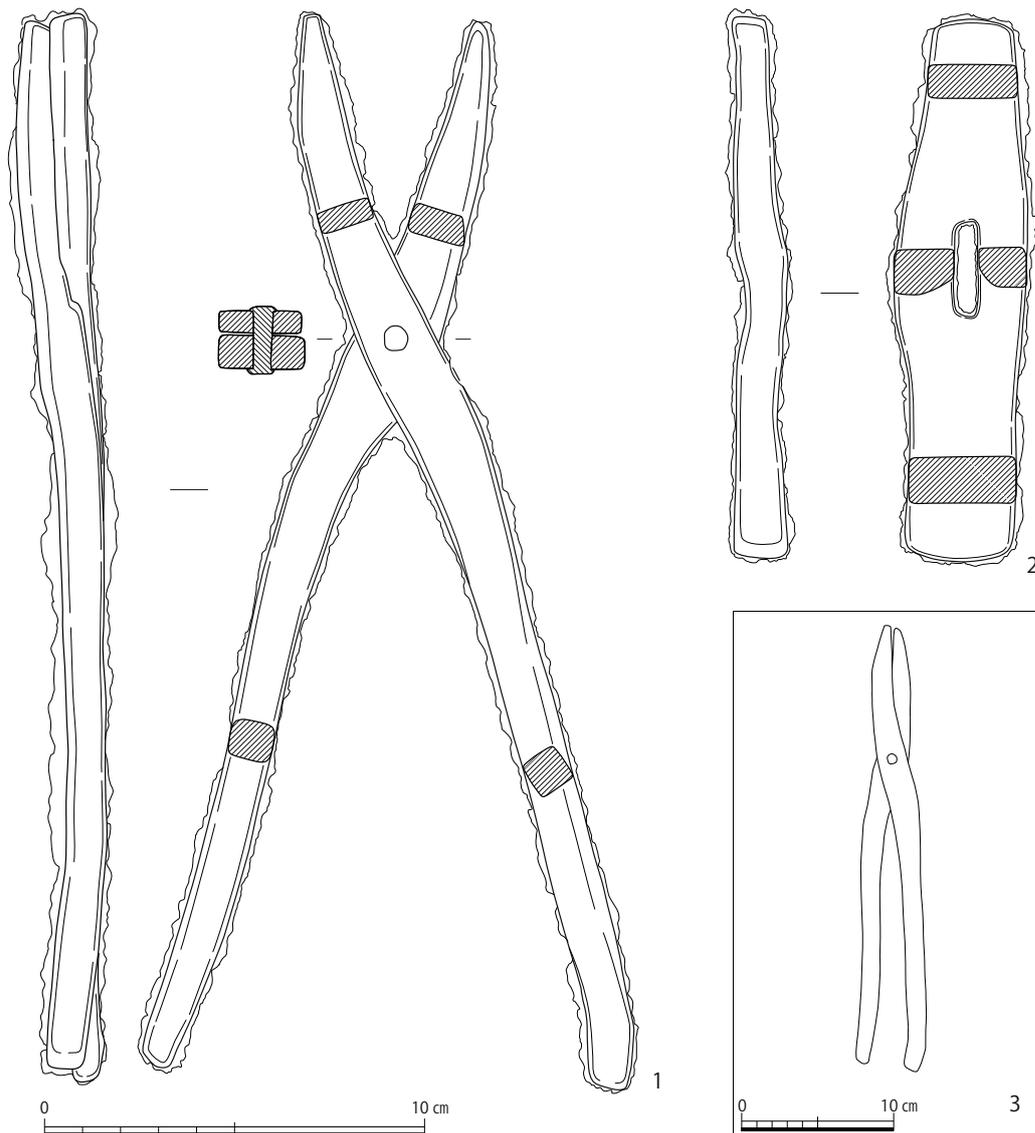


図3 郷土塚4号墳出土鉄冶具 (1・2 : S=1/2、3 : S=1/5)

(3) 鉄刀 (図4-4・5)

4は鉄刀の刃部の破片で残存長24.6cm、幅1.9cm、厚さ0.5cm、重さ93.6gをはかる。関部は遺存しない。5は茎部の破片で残存長4.0cm、幅1.1cm、厚さ0.5cm、重さ9.3gをはかる。残存長1.8cm、直径0.6cmの鉄製の目釘が挿入されたまま錆着している。遺存部位が重複しないことなどから、4と5は同一の個体である可能性が高い。どちらも鞘や柄などに由来する木質などの付着は確認できなかったが、目釘が遺存することから少なくとも柄木は備えていたものとみられる。

(池田野々花)

(4) 鉄鍬 (図4-6～10)

鉄鍬は5点確認されている。6は平根系で全長10.7cm、身部長4.1cm、身部幅2.3cm、頸部長2.3cm、茎部長4.4cm、重さ11.6gをはかる。刃部断面は両丸造り、頸部断面は方形をなす。頸部関はナデ関である。茎部に矢柄の有機質が残るが、樹皮巻などはみられない。7は残存長9.2cm、身部長7.3cm、身部幅1.5cm、重さ6.5gをはかる。刃部断面は平造り、茎部断面は

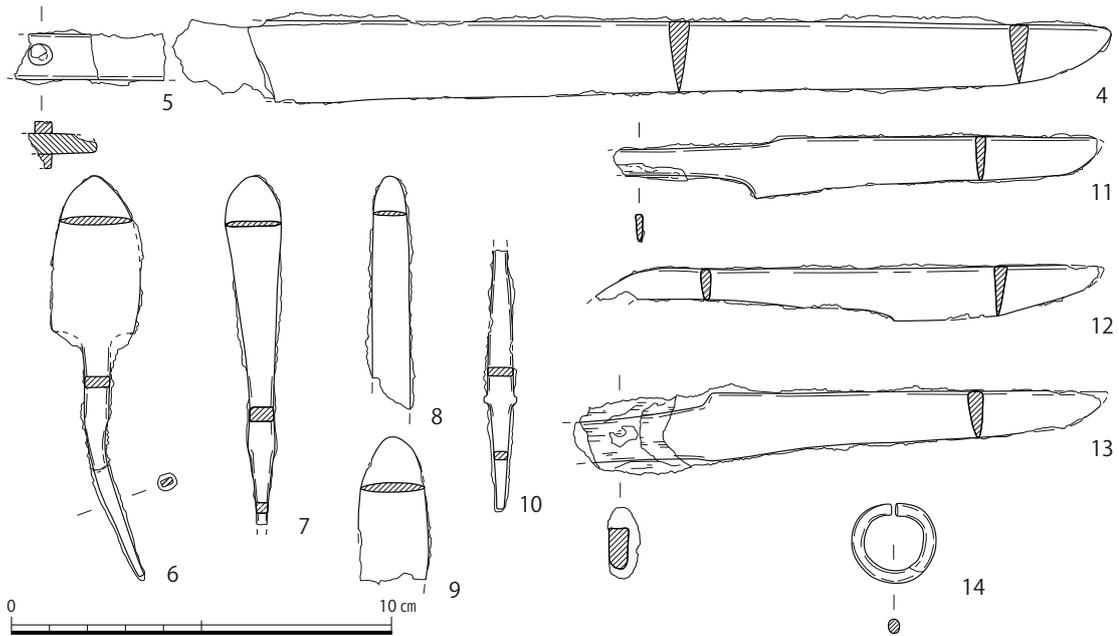


図4 郷土塚4号墳出土金属製品 (S=1/2)

方形をなし、ナデ関である。8は茎部が欠損し、残存長6.1cm、身部幅0.9cm、重さ2.8gをはかる。身部断面は両丸造りで、身部が長く鍔身部側縁が直線的であることから柳葉系と考えられる。9も茎部が欠損しており、残存長3.8cm、身部幅1.8cm、重さ5.2gをはかる。身部断面は両丸造りで、鍔身部側縁が直線的である。身部幅が広いため平根系の可能性が高い。10は刃部が欠損するが長頸鍔である。残存長6.9cm、茎長2.8cm、重さ4.1gをはかる。頸部断面、茎部断面は方形をなす。既存の図面（小池1988：第3図1）には描かれていないが棘状関をもつことを確認した。棘状関は水野敏典編年後期2段階（TK43型式期）の長頸鍔にほぼ齊一的に採用される関の形状であり（水野2013）、本古墳の上限年代を考える手がかりが一つ増えたこととなる。

(5) 刀子 (図4-11～13)

刀子は3点確認されている。いずれも刃先と茎尻を欠き、完形品はない。11は残存長12.7cm、重さ5.4gで、刃部は長さ9.0cm、最大幅1.6cm、厚さ0.2cm、茎部は長さ3.7cm、幅0.7cm、厚さ0.2cmをはかる。両関式で、茎の下端に柄材とみられる木質が付着している。12は残存長13.1cm、重さ12.3gで、刃部は長さ5.4cm、幅1.4cm、厚さ0.3cm、茎部は長さ7.9cm、幅0.8cm、厚さ0.2cmをはかる。刃関式で、茎尻を刃側にわずかに曲げる。13は残存長13.9cm、重さ33.2gで、刃部は長さ10.3cm、幅1.7cm、厚さ0.4cm、茎部は長さ3.2cm、幅1.1cm、厚さ0.5cmをはかる。両関式で、茎部には柄材とみられる木質がよく残る。 (守田悠)

(6) 耳環 (図4-14)

直径2.1×2.2cm、厚さ2.8×3.3mm（いずれも縦×横）、重さ3.7gの耳環が1点出土している。芯部のみ遺存する銀環として報告されているが（石井ほか1986）、表面に何か別の金属を被せていた形跡がまったく認められないことから、銀製の耳環とみられる。 (諫早)

3. 鍛冶具の副葬

(1) 副葬鍛冶具の評価

ここからは郷土塚4号墳出土遺物の中でも、最も特徴的な遺物である鍛冶具の意義について考えてみたい。郷土塚4号墳は共伴須恵器から鍛冶具副葬が終焉を迎えつつあった6世紀後半の古墳であり、同時期の鍛冶具副葬古墳としては、鉄鉗や鉄鎚、鑿、鉄床を出土した奈良県高取町イノヲク1号墳があげられる（高取町教育委員会1990）。両古墳から出土した鉄鉗を比べてみると、全長こそあまり変わらないが、はさみ部をみると郷土塚4号墳例がはさみ部先端を閉じた際にはさみ部に空間ができない濱崎範子（2008）分類C類であるのに対し、イノヲク1号墳例は郷土塚4号墳例よりもはさみ部が短く、先端を閉じた際にはさみ部の間に空間のできるB類と、はさみ部形態はまったく異なる。松井和幸の「この種の工具は、使用に際してこの原理を応用」（松井1991：565）しているため、はさみ部が短いほど工具としての完成度が高いという意見をふまえれば、郷土塚4号墳例のはさみ部の長さや屈曲の弱さは、イノヲク1号墳例に比して「道具としては未改良」（同上）という印象を受ける¹⁾。

一方で、民俗例には用途ごとにはさみ部形状の異なる鉄鉗を使いわけることがあり、実際に閉じ合わせるとはさみ部全体に空隙がなくなる形状の鉄鉗も確認されることから、はさみ部形状の違いを機能差に求める考えもある（濱崎2008）。今回取り上げた二つの資料に関して言えば、少なくとも副葬のタイミングに大きな時間差はないため、形態の違いは機能差とみておくのが妥当であろう。なお、濱崎は郷土塚4号墳例のようなはさみ部に空隙がなく面で素材を掴む鉄鉗が、民俗例では鋏などのある程度厚みが均一で比較的薄いものの鍛冶作業に限定的に用いられるとしており（濱崎2008：56）、はさみ部形状から製作した製品についても推察することができる。

鉄鎚については松井がサイズから全長14cm以上の大型、11～15cm内外の中型、10cm以下の小型の3種類に大別した上で、形態から今日の玄能^{げんのう}のように両端が平坦か、一端が平らでもう一端が丸みを帯びるaタイプと、一端は平らでもう一端が先細りになり鑿のように用いられたと考えられるbタイプの2種類に細分している。郷土塚4号墳例は中型aタイプにあたり、「長い割には厚さの薄い造り」であることから、「幅の狭い部分を加工するなど特殊な用途に限定できれるかもしれない」とみる（松井1991：570）。先述したイノヲク1号墳の鉄鎚は破損しているため全長が不明なものの、幅は3cm程度で、断面円形の特殊な形状をしている。また奈良県天理市ホリノヲ2号墳からは全長17cm、幅4cmを超える大型の鉄鎚が出土している。このように鉄鎚の形状は多様であり、作業工程や目的に応じて多様な形態の鉄鎚が用いられたことが想定され、郷土塚4号墳例もそのような多様性の一つとして理解することが可能である。その場合、郷土塚4号墳例は薄い形状から、細かな作業に使用されたことが想定でき、鉄鉗の想定される用途とややずれが生じるようにも思える。ホリノヲ2号墳では大型の鉄鎚に見合うような全長が40cmを超える大型の鉄鉗が出土しているが、奈良県御所市境谷4号墳は同じく大型の鉄鉗が出土している一方で、鉄鎚は全長8cmの小型のものである。このように、鉄鉗と鉄鎚のサイズは必ずしも関連しない。

なお、古墳副葬鉄製鍛冶具には鉄鉗、鉄鎚、鑿、鉄床の4種があるが、3種以上の鍛冶具を

副葬する古墳は大和盆地に分布の中心があることから、大和地域に優位性があり、畿内を中心にセツの意味が同心円状に形骸化することが指摘されている（加藤 1998）。南山城地域の郷土塚 4 号墳が山城唯一の鍛冶具副葬古墳であること、2 種の鍛冶具が副葬されていたことも、そのような大和盆地を中心とする鍛冶具副葬の延長線上で捉えられるだろう。

（2）鍛冶具副葬古墳としての評価

古墳時代中期の鍛冶具副葬古墳は大型墳が目立つが、後期になると小型の群集墳が増えてくる（加藤 1997）。村上恭通によれば中期の鍛冶具副葬古墳の被葬者は、統括者として間接的に鉄器生産に関与した厚葬墓の被葬者と、より直接的に鉄器生産に関与した薄葬墓の被葬者に区別できるとされるが（村上 2004）、後期に至り後者の性格がより強まったものと考えられる。後期に入ると鉄滓を供献する古墳も多くみられるようになり、同じ群集墳内に鍛冶具を副葬する古墳と鉄滓を副葬する古墳が両方存在する例もしばしば認められる。また、そのような群集墳の周辺には、鍛冶関連遺跡が存在する機会が多いことから、それらの古墳の被葬者に鍛冶工人が想定されることもある（花田 2002）。

真鍋成史によれば、古墳時代中期の木津川・淀川流域には「旧郡単位で 1 か所程度」に鍛冶遺跡が配置されていたようであり（真鍋 2017）、精華町森垣外遺跡（旧相楽郡）で中期から後期にかけての、城陽市芝ヶ原遺跡（旧久世郡）で後期の鍛冶工房が確認されている。京田辺市域（旧綴喜郡）ではまだ古墳時代の鍛冶関連遺跡は発見されていないが、郷土塚古墳群の東方に広がる縄文時代から近世にかけての大規模集落遺跡である薪遺跡では、8 世紀後半の遺物を含む廃棄土坑から鞆羽口と椀形鍛冶滓が出土しており²⁾（増田 2008）、少なくとも 8 世紀代には周辺で鉄器生産がおこなわれていたことは確実である。郷土塚 4 号墳出土鍛冶具は、それを遡る 6 世紀後半には周辺で鉄器生産がおこなわれていた可能性を示唆するとともに、郷土塚 4 号墳の被葬者がそれに直接関与していたことを示す資料として評価できるだろう。（池田）

4. おわりに

ここまで、鍛冶具を中心に郷土塚 4 号墳出土遺物について再検討を進めてきた。郷土塚 4 号墳に鍛冶具が副葬された背景については、当初より小池寛（1988）が鉄器生産との関係を指摘しており、本稿もまた屋上屋を架す結果となった。上述の薪遺跡以外にも、郷土塚古墳群の南方すぐの堀切 6 号横穴では、竜山石製の組合式家型石棺の設置前に木炭を敷設しており、同じく鉄器生産との関わりが想起される。また、3 km 南方にいけば、1968 年に森浩一によって調査された田辺天神山遺跡があり、その背後には小池が注目した「多々羅」地名が広がる。田辺天神山遺跡についても近年、当時の調査成果の再評価がおこなわれ、弥生時代後期後半～庄内式期の原始的な鍛冶の痕跡が確認された（禰亘田 2020、真鍋 2022）。引き続き既知の資料の再検討から、周辺における鉄器生産の可能性について検討を進めていきたい。（諫早）

註

- 1) 鉄鉗のはさみ部長／全長を計測した加藤俊吾（1997）は、郷土塚 4 号墳例のような 25～35%（A 類）、イノヲク 1 号墳例のような 20%前後（B 類）と 10～15%（C 類）に分けた上で、B 類の方が A 類よりも鉄鉗としての機能を発達させつつも、A 類と B 類が時間的に一部併行することから、両者の製作背景が異なっていた可能性を想定した。

2) 薪遺跡では古墳時代後期末に築造され、7世紀後半から8世紀後半に削平・整地された薪高木2・3号墳の周溝からも鍛冶滓が出土している(増田2008)。整地作業の際に周辺から混入した可能性もあるが、古墳に鉄滓が供献された可能性も考えられる。

謝辞

本稿を作成するにあたり、下記の機関及び諸氏には大変お世話になった。末筆ながら記して感謝の意を表したい。(敬称略、五十音順) 京都府埋蔵文化財調査研究センター 伊賀高弘 小池 寛 筒井崇史

参考文献

- 石井清司 1985 「田辺町郷土塚4号墳の調査」『京都府埋蔵文化財情報』第18号 京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 石井清司・黒坪一樹 1986 「12. 京奈バイパス関係遺跡昭和60年度発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第20冊 京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 加藤俊吾 1997 「鉄製鍛冶道具の基礎的分析—古墳時代を中心として(前編)—」『大阪市立博物館研究紀要』第29冊 大阪市立博物館
- 加藤俊吾 1998 「鉄製鍛冶道具の基礎的分析—古墳時代を中心として(後編)—」『大阪市立博物館研究紀要』第30冊 大阪市立博物館
- 京都府教育委員会 2003 『京都府遺跡地図〔第3版〕』第3分冊
- 小池 寛 1988 「鍛冶道具副葬の新例—田辺町・郷土塚4号墳」『京都府埋蔵文化財情報』第29号 京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 高取町教育委員会 1990 『イノヲク古墳群発掘調査報告 高取町藤井第2次』(高取町文化財調査報告10)
- 田辺郷土史会 1959 「ゴシ塚古墳」『田辺町郷土史—古代篇』
- 濱崎範子 2008 「韓半島出土の鉄製鍛冶具について—日韓出土資料の比較から—」『朝鮮古代研究』第9号 朝鮮古代研究刊行会
- 禰亘田佳男 2020 「近畿における鉄器製作遺跡の「再発掘」『新・日韓交渉の考古学—弥生時代—(最終報告書 論考編)』「新・日韓交渉の考古学—弥生時代—」研究会・「新・韓日交渉の考古学—青銅器～原三国時代—」研究会
- 花田勝広 2002 『古代の鉄生産と渡来人—倭政権の形成と生産組織—』雄山閣
- 増田孝彦 2008 「薪遺跡第8次発掘調査報告」『京都府遺跡調査報告集』第128冊 京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 松井和幸 1991 「古代の鍛冶具」『古文化論叢—兎島隆人先生喜寿記念論集—』兎島隆人先生喜寿記念事業会
- 真鍋成史 2017 「金属器生産からみた木津川・淀川流域の弥生～古墳時代集落」『木津川・淀川流域における弥生～古墳時代集落・墳墓の動態に関する研究』同志社大学歴史資料館
- 真鍋成史 2022 「鍛冶実験の成果と理化学的分析・田辺天神山遺跡出土例との比較」『近畿地方における弥生時代～古墳時代初頭の金属器生産と社会』(国立歴史民俗博物館共同研究公開セミナー発表要旨集)
- 水野敏典 2013 「鉄鏃」『古墳時代の考古学』4(副葬品の型式と編年) 同成社
- 村上恭通 2004 「古代における鍛冶具副葬古墳と被葬者像—中期を中心として—」『考古論集—河瀬正利先生退官記念論集—』河瀬正利先生退官記念事業会